

助け合い

東日本大震災から2年が過ぎました。懸命な努力にもかかわらず、今も行方不明の方が多く、復興も道半ばという状況ですが、被災地のことを思う人の気持ちはずっと続いていると思います。四国災害アーカイブスの資料整理をしていますと、四国の災害でも被災後に人々が助け合い、励まし合っている様子が見えます。以下の例をご紹介します。

昭和21年(1946)12月21日に南海地震が発生し、徳島県穴喰町(現海陽町)では津波により死者9人、負傷者58人のほか、家屋などに多大な被害が出ました。被災後、地元の婦人会、青年団、役場の人々などは被災者の救護や復旧作業のため、連日連夜不眠不休の活動をしていました。そうした中、地震から3日目に、進駐軍の徳島軍政部の少佐が海上機で飛来し、穴喰町の被災状況を視察するとともに毛布1,500枚を提供しています。「穴喰町史上巻」(1986年)には「寒空におののく罹災者にとって、何よりの暖かい贈り物であった」と記されています。敗戦の翌年のことですので、進駐軍に対する人々の思いはさまざまだったと思いますが、毛布に込められた温かい気持ちに素直に感謝している様子が伝わります。

明治17年(1884)8月25日、香川県鴨部下荘村(現さぬき市)で、烈風が起こり、波濤が堤防を決壊させたため、家屋が流され、稲や甘藷など作物すべてが被害を受けました。人々は窮乏のどん底に陥ることになりましたが、力を合わせて復旧に努めました。鴨部川の土手に建つ水害記念碑には「ここにおいて村民一同相謀り金穀を集めて被害の救済に当たった。このことが聖聞に達して下賜金を賜いその難を救恤された。」(「農林業の石碑」1981年、による)と書かれています。自力で一生懸命頑張る人々を、天が見放すはずがありません。「天は自ら助くるものを助く」という言葉が思い起こされます。

昭和14年(1939)は、7月初めから夏型の気圧配置となり、高温寡雨のため、愛媛県宮窪町(現今治市)では、植付けしても水不足で収穫皆無となる田が出るほどでした。その中で、向側集落の共同耕作は特筆されます。「宮窪町誌」(1994年)によると、二つの農事実行組合が協力して、数原池がかりの水田7町6反余のうち、池の貯水量と必要な養い水を考慮して3町6反余だけに植え付けをし、被害を最小限度に食い止めました。秋の収穫は54石余で平年の約55%でしたが、これを田の等級や地力などを勘案した分配方法で関係者全員納得の上、公平に分配しました。困難を前にして、少ない池の水を争うのではなく、その水を活用してみんなが生きる道を考え、実行したことに感心します。

大正9年(1920)8月15日~16日の集中豪雨により、高知県三原村の被害は死者19人、負傷者15人、住家の流失13戸、田畑の流失・埋没114町余などに及び、有史以来の大災害となりました。この時、各方面から救援寄付が多数寄せられました。その中に神戸の鈴木商店からの外国産米23石1斗も含まれていました。その恩義を三原村の人々は忘れませんでした。「新編三原村史」(2003年)には、平成7年(1995)の阪神・淡路大震災の後、三原村は神戸市へ50万円と、鈴木商店の流れを汲む鉄鋼会社へ白米4トンを2台のトラックに積み、3月末に送り届けたと記されています。75年後の恩返しでした。

災害に遭わないことが望まれますが、もしも被災した時には先人の行いを見習いたいものです。